會報

1960年1月 | 207 | 日本山岳會

コーガン夫人を悼む

川森左智子

「パリに着いたら、小包便でいゝから送つて下さい」

と、K氏からお頼まれして、はるばる日本から預つて来た、美しく高雅な、木目こみ人形のお雛様の一対。

せつかく、空路つゝがなくパリに持ち込んだものゝ、完全な姿で届けなければ責任が果せない——旅先の不自由な中で、やつと探し求めた手頃なダンボールの箱に、厳重に詰めて、ニースのマダム・コーガンに送つたのです。

幾日か経つて、マダム・コーガンから「ムッシュ、カワモリ」と言う呼びかけで書かれた、安着御礼の手紙が届けられたのです。

私は、かねがね尊敬している女流登山家の第一人者の彼女から、男性扱いを受けた光栄ある間違いを、頬笑ましく思つたのでした。

日本のことを知らない彼女にすれば「サチコ」が、女か男か解るはずもなし、また、小包に添えた簡単な手紙の中から、フランス語特有の女性・男性の変化を見出せなかつたでしようし、托した人の友人だから、勿論男性と思い込んでしまつたのでしよう。

「私も、山の好きな日本の女性で、日頃から、マダムの偉大な山歴を尊敬していること、また、貴女の仕事（海水着のデザイン）の方面でお知合の、ニースのA氏夫妻と昵懇なので、秋にはニースを訪れる予定故、その折には是非お目にかゝり、山のお話を伺いたいと希つていることなど書き送つたのです。

折返して

「同性の方となれば大変嬉しい。日本の山のことなど伺いたいし、是非ニースに来たら立寄るように。自分は目下ペルー遠征の準備で大童だ」と男まさりの達者な筆跡の手紙を受取つたのです。

日本を出発の時から、若しも彼女に逢えたら——と、ひそかに期待し、その時のお土産にと用意してきた金泥に、絢爛たる白の桜花が気品高く画かれている舞扇。

「日本では、末広と言つて大変縁起のよい物、ペルー遠征の御成功を祈りながら」

と書き添えて送つたのです。

夏山に明け暮れる生活の中で、忘れるともなく、マダム・コーガンのことが念頭から離れていました。

シャモニでの八月も半ば過ぎの或る朝のことでした。

ホテルのフロントで手にした手紙の中に、パリから附箋づきで廻された一枚の絵葉書。

真白なピラミッド型のアンデスの山を背景に、特異な編笠のような大きな帽子を被つたポンチョ姿の南米土人の風俗、その上に白く抜いた文字は、

「Expédition aux Andes 1957」

「ペルー遠征の成功を告げ、扇の賜物に対する友情を感謝する」

クロード・コーガンとサインされたその絵ハガキを見つめながら、遠征のあわたゞしい中から、あつたこともない日本人の私を思い起して書き送つてくれた彼女の優しさに——心の暖まる思いでした。

ホテルのロビーの書棚をあちこち探しあてて彼女等の遠征記を、辞書を片手に、むさぼり読んだことでした。

ドイツ、オーストリヤ、イタリーも、シシリヤ島の果まで旅を重ねた私が、ニースに辿り着いたのは十一月も終りの頃でした。

出迎えてくれたマダムAは、

「マダム・コーガンにもあわせて上げなくては——」

早速に電話をかけてくれました。

「是非ゆつくりあいたいが、実は今夜スキーに出かける予定なのでその前二三時間位なら都合がつくから、お食事を一緒に致しましよう」と、しきりに誘つて下さいました。しかしその夜はすでに先約があり、彼女の誘いに応じられぬことを残念がりますと、一週間位で帰つて来るから、それまで是非滞在するようにとまで親切にいい添えてくれる彼女の響きの美しい優しい声音が、今も耳朶に残つています。

それから数日をニース周辺の見物に過した私は、山の上にある中世時代に創られた古い街、サン・ポーロを訪れた時のことでした。

街を囲む壊れかけた石の塀の間から、思いもかけぬ蒼く高く拡がつた空の遠い彼方に、白雲に彩られたアルプスの山脈を望み見た私は、一瞬、呼吸づまる程、その美しさに打たれたのでした。

山の彼方の空遠く

幸住むと人の言う…

ニースに住む、マダム・コーガンが山に魅せられた心境に思いを致したのでした。

日程に限りのある私は、ついに彼女の帰りを待つこともせずニースを引上げて来ました。

彼女を隊長にした国際女流登山隊のチョー・オユー（八一五三米）への成功を陰ながら念じ、期待していた私は、

——マダム・コーガン、ヒマラヤで遭難——の新聞の記事を、信じられぬ思いで読んだのです。

肌身離さず持ちつづけたと言う彼女の最愛の御主人の写真と共に、ヒマラヤの雪の中に逝つた偉大な女流アルピニストの悲劇を、想い痛むにふさはしい、高い、深い蒼空が台風一過の東京の上に拡がつています。まるであの二年前の秋のニースの空のように。

空のどこからか、彼女の美しい響きの高い声が聞えて来そうな気がしてならないのです。

目次

マダム・コーガンを悼む……（一）
奥穂で落ちた話……（二）
続「マナスル」に対する海外の反響……（四）
金山村行心覚え……（五）
続—ヒマラヤを越える白鳥……（六）
武井真澄氏逝く……（七）
図書紹介……（七）
会務報告……（九）
第十四回国体登山……（一一）
支部会務報告……（一一）

奥穂で落ちた話

（解説）本稿は大正十一年七月十一日慶大早川種三、大賀道丙、渡辺三郎、学習院OB板倉勝宣、松方三郎、伊集院虎一の六氏が上高地より現在の天狗のコルを経て奥穂高、前穂高を縦走した当時の紀行である。伊集院氏が大正十二年学習院輔仁会雑誌に掲載するため執筆されて、そのまゝ忘れられ、このほど三十六年ぶりに同氏の手もとから発見されたものである。この簡単な概要は登高行第四年の年報欄に出ており、また槙氏が同じく登高行第四年に発表された「岩登りに就て」というわが国にはじめてこの新しい技術を正確に紹介された論文の中にもこの折の出来についてふれられている。大正十一年という年は、その前年アイガー東山稜を登攀して帰朝された槙氏をむかえ、日本の登山界は大きな転機をみせた年であつた。三月―四月には槍ケ岳、立山、剣岳の積雪期初登頂が慶大隊によつて行われ、七月には槍の北鎌尾根が登られ、八月には穂高涸沢で槙氏らによりはじめて岩小舎を中心に岩登り生活が行われている。そして涸沢岩小舎で岩登りが試みられるより一足先に、板倉氏らの本稿における奥穂山稜の登攀が、英国製のロープやシュタイクアイゼンやピッケルを用いてはじめて穂高において本格的に行われたのである。その意味においても本稿は極めて貴重な意味をもつている。

なお岳川から天狗のコルを経て奥穂への登攀は大正元年八月十三日鵜殿正雄氏（案内中島作次郎）につぐ第二回目の記録であろう。板倉氏はその翌年の大正十二年一月立山松尾峠でなくなり『亡き板倉の思い出として当時のものをそのまゝ出すことにした』と伊集院氏は本稿にそえ書をされている。

（山崎　安治）

伊集院虎一

この短き紀行文は昨大正十一年七月に慶応の山岳会の早川、渡辺、大賀の三君と故板倉と松方及び自分の三人が上高地で出会いあの辺の山を歩いた時のものゝ一部である。思い出して見ればあの時が板倉と一諸に山に登つた最後であつた。アクシデントのあつた後板倉が深い霧の中を一人であつちこつちと道を探がしているぼんやりした後姿は今なお忘れることが出来ない。一年を経た今日遅まきながら板倉の思い出として書いて見た。

眼を覚ましたのは四時頃であつた。誰かもう起きて火を燃しているらしく未だ薄暗い小屋の中には煙が漲つていた。スリーピングバッグから這い出して出発の準備に取り掛つた。小屋を出て見ると天気はまず申分ない。今日は前穂高でゆつくり山を眺めながら呑気に一日暮す予定だつたので食料や携帯品もごく簡単にした。各自がパン半斤を持ちその他は飯盒に一杯の米飯、バター半斤、ウルスト二本、紅茶砂糖若干、コホアパラート一つを皆で分担した。ザイルはまあ気分だけでもと英国製三十米のを一本板倉が持つた。すつかり用意して小屋を閉じて出たのが五時過であつた。早朝の渓谷の新鮮な空気はさすがにヒヤリと感じた。未だ上高地の谷は眠りから覚め切れない。河童橋から左へと入る。谷は次第に明るくなつて来た。やがて奥穂高の頭に朝の太陽の第一線がサッと射し岩壁が赤く燃え段々と下に下つて来た。眠れる巨人の眼覚めだ。前穂高へと行く道の森林帯の終ろうとする所に岩の下から氷のような冷い水の湧く所がある。そこで暫く休んだ。この時までは皆前穂高へ行くつもりでいたがここで休んで振り廻つて西穂高のコルから奥穂高へと続いてる急峻な山稜、途中の奥穂高の直ぐ手前の二つの大きなジャンダルムが朝日に輝いて青い空に鋭い曲線を画いてるのを見た時六人の山男の眼は異様に輝いた。是非あの岩壁にへばり付いて見度くなりまた誰も未だあの山稜を通つたことがないのですつかり引き付けられてしまい直に目的を変更してあの山稜へ行くことにした。八時頃にそこを出で少し引返して岳川の雪渓を横切り、そしてあの山稜の最も低いコルを目懸けて急なガレを登り始めた。暫く行くと急な雪渓となつた。スタイグアイゼンを持つ者は穿いた。雪渓は次第に細く急になり両側の岩壁が迫つて来る。雪渓を七八分登つた所の岩に腰掛けてパンやチョコレートを少し噛つた。この辺は両側とも急な一枚岩の岩壁でその上に岩の層が逆層である。試みに早川が登ろうとしたが如何にトリコニーのナーゲルでもどうしても登ることが出来なかつた。逆の層の岩は全く登り難いものである。もうコルは直ぐ頭の上に見える。この辺から雪渓は更に急になり細くなるがナーゲルを打つた登山靴なら大した困難はしない。十一時ようやくコルに達した。蒲田川の深い大きな谷を距てゝ向うには笠嶽が雲の中に聳えている。ここで紅茶を沸かして軽るい中食を取つた。十二時出発して奥穂高への山稜を登り始めた。ここからは二時間か三時間あれば楽に奥穂高の頂へ着けると思つていたが途中で意外な時間を要し約六時間を要したのであつた。この岩の山稜は狭くかつ次第に急になつて来る。ことに両側の谷が相当に急で深いので愉快だ。トリコニーの効果は極度に発揮される。ただ岩が頗るもろい――これは穂高全山を通じてのことであるがこの辺はことに甚しい――ことにのみ細心の注意を払う外は決して困難な山稜伝いではないと思う。時々飛騨の谷から霧が巻いて来る。霧に巻かれ急峻な岩壁を全神経を緊張させつゝ一歩〳〵登り行く時山男の心は全く純真な境に入る。この急な山稜を登り切ると第一のジャンダルムに達する。奥穂高から前穂高へのグラートを三人の縦走者が伝つて行くのが手に取るように見える。一時間もあれば楽にそこまで行ける位に見える程近い距離だ。このジャンダルムは別に難しいこともなく通過した。両側とも非常に急な絶壁になつているのでちよつといゝ気持になつた。ちようど二時半頃であつた。しかしここまでの行程によつて此の山稜伝いは予想以上に時間を要することが分りまたこの先きも全然未知の行程でありこの様子では随分時間も掛りそうなので出来得る限り急いだ。時間の節約という点からもザイルをなるべく用いないことにしたが時間にさへ余裕があるならこの辺から三四人宛アンザイレンしてクレッテライをやつたなら随分いゝ場所だろうと思う。第二のジャンダルム即ち奥穂高から最も近くに直立してる通称天狗岩の頭に着いたのが午後三時すぎであつた。この降路の二、三十米は全くえぐられているような岩壁でどうしてもザイルを用いないと危険である。始めに板倉がザイルを付け上の方の足場のいゝ所で二人ばかりで、それを保持し徐々に下りて行つた。約半分程下つた所にやや足場のしつかりした所があつたので更に次の人がそこまで下り三人だけそこまで下りそこからはまた足場が悪いので今度は順次に人の背中を渡つて次の場所まで降りた。この背中を渡る時に早川のナーゲルが板倉のリュックサックに引掛り身体の中心を失い危く直下二百米許りの断崖に飛び込む所であつた。ここで皆のリュックサックを一まとめにして下す時に一つだけザイルから外れて落ちてしまつた。霧が巻いていたし断崖が急なのでどこに落ちてしまつたか分らなかつたがどうも音の様子では下の方のベルグシュルンドに落ち込んだらしかつた。ともかくも無事にここを通過し更に下り天狗岩と奥穂高との間の細い

狭いコルに下り切つたのが四時半であつた。霧は深く雨さへ加わり前途の行程が更に見当が付かなかつた。もしこの先きこのような急な下りがあつたら到底明るい中に奥穂高に達することは出来ない恐れがありかつラテルネの準備がないのでどうしても明るい中に熟知の山稜までは着きたかつた。皆で相談の結果ここから岳川に面したクーロアールの頗る急な雪渓を少し下り途中から岩壁に取りつき奥穂高をからんで前穂高へのグラートに出ることにした。またもう一つこの雪渓を下る道を取つた有力な原因は先刻落したリュックサックには野営に是非必要な品があるので是非と下る途中でこれを取りたかつたからである。しかし後になつてゆつくり考えて見るとどうしてもあの時には雪渓を下らずに飽くまで山稜を伝つて奥穂高へ向うのが本当であつたと思う。どうもあの時は霧のために皆が錯覚を起していたらしい。松方が最も長いツアッケのスタイグアイゼンを持つていたので先頭となりザイルを付けて右側のベルグシュルンドに沿つてリュックサックを探しに行つた。三十米のザイルの延び切つた所で幸いにもリュックサックを発見した。ここから一同は一本のザイルに結び合つた。この時非常にザイルの不足を感じた。それは三十米のザイルは大体三人に対しての長さであるのに人員は六人いた。即ち人数に対してザイルは半分しかないわけであつた。今朝出発の時は別にこんな所に来る予定でなかつたので用意が足りなかつた。無理して六人結び合つた。先頭と二番目だけは十五尺の間隔を置き他はいずれも七尺—十尺位で二人の間が非常に短い。これでは何かアクシデントの時に十分止めることが出来ないと思つたが、とうとうその通りになつてしまつた。(M)が先頭となり(W)、(O)、(K・I)、(T・I)、(H)の順にアンザイレンした。板倉と自分はスタイグアイゼンを持たなかつた。早川は最も馬力があるので後衛を承つた。雪渓の状態は最も悪いものであつた。東南に面しているので殆ど終日強い日光によつて直射されかつ加ふるに雨のために極度に雪が弛るんで足場が頗る不安であつた。そしてこの雪渓は遙かに下方百米位の辺に真中に黒い大きな岩があつて二分されなお二十米位で全く切れて滝になつているらしかつた。注意してツィックツアックに下り約百分の一程下りた時——この辺は最も急で今まで自分の歩いた雪渓の中で最も急だと思つた——ちようど松方が雪渓の左端に達し方向を変えようとステップを切つている時に何かのはずみで大賀の足場の雪が崩れて横倒しになつて滑り出した。ハット思つて直ぐザイルを締めたが前述の如くザイルが短いのでその効なく忽ちに次の渡辺、板倉は一諸に引張られて滑り出した。自分も前の板倉が滑り出した次の瞬間には既にピッケルを打込んだ効もなく腰に強いショックを受け同じように横倒になつて引きづられて行つた。ピッケルでもつて出来るだけブレーキをかけたが雪渓が急でかつ弛るんでるので一時はやや速力がゆるんだがどうして止まらず六人がじゆずつなぎになつて滑り落ちて行つた。急に自分の頭の上に何かどしんと落ちて来てその時から非常にスピードが加つた。これは最後の早川がザイルを締めつゝ暫くふんばりながら引きずられたが遂いに落下の力の方が大きいために前にのめつて自分の上に逆落しになつたのであつた。必死に雪中に打ち込んでいるピッケルの先からは盛んに雪の粉が飛ぶが速力は更にゆるまない。既になすべき全力は尽くされているのだ。六人のピッケルは完全に雪中にぶち込まれてある。もう施すべき策もない。ただ運命に従うよりなかつた。下を見ると早川が背中を雪につけて手足で雪を突張りながら滑つてるのが見えた。雪渓の分岐点の岩も霧の中に怪物の如く横たつている。この速力であれに衝突したら堪らない。またそれを逃れても下は滝だ。あれに落ちたら粉微塵になることは確かだ。種々なことが電光のように頭に浮ぶ。とうとうやつたなと思つた。何秒たつたか分らない。長いような短いようなものであつた。急に不意に胸のザイルに強いショックが来て落下が止つた。奇蹟だ、死の数秒前まで来て死の境に片足を踏み込みながら再び生の世界へ引戻されたのだ。どうして止つたのか暫くは更に分らなかつた。見上げると頭の上に板倉の靴底が見える。更に上の方には渡辺、大賀が四つん這いになつてる。渡辺の先きのザイルがベルグシュルンドの雪の中に深く食ひ込んで松方が見えない。直ぐ皆で大声で松方を呼ぶとベルグシュルンドの中から大丈夫だ!!という元気のいい返事があつたのでまず安心した。恐ろしい程急な雪渓の途中で危くも止つたわけだ。普通ならとてもこんな所には来られる所ではない。七八十米落ちたために飛んでもない所に来てしまつた。両側の嶙い急峻な岩壁が巻き上る霧の中から頭を圧して聳え立つてる。下を見るともう二十尺も行くと分岐点の黒い岩だ。下には滝の音さえ物凄く聞えている。松方の落ち止つている所まで登つてベルグシュルンドをのぞくと松方は途中の岩に腰掛け下を向いている。左の耳から肩にかけて白いスウェターに真赤に血が流れている。始め見た時は大分傷は重いと思つた。暫しは返事もなくうなだれている。暫く身体をゆすつてると顔を上げてここはどこかと問う。烈しいショック——五人の重さを一時に受けたのだから——のため一時気を失つたものらしい。時計を見ると五時だ。若しこのまま松方が歩けないとすればどうしても誰か温泉まで強行して人夫を救援に連れて来なくてはならない。ここから温泉までは未だどのくらいかゝるかまるで見当がつかない。自分達は奥穂高のクーロアールの雪渓を恐く未だ誰も来たことない所まで落ちてしまつたのだからこれから登るにしても下るにしても容易なことではない。ともかく板倉と自分が温泉まで下つて直ぐ人夫を連れて来ることにした。濛々と巻いている霧の中から時々さつきのコルが見上げる許りに上に見える。凄愴たる光景だ。暗くならない中にと板倉が道を見出しに出掛けた。この時の霧の中をあつちこつちと道を探がしている板倉のボンヤリした黒い影は今なおはつきりと自分の眼前に浮んでいる。非常に淋しい気持がした。その中松方が段々はつきりして来て大丈夫歩けるというので皆で出発することにした。早川が後から松方の雨合羽をつかみ自分が下から松方の足場を支えながら暫く下つた。この辺の岩壁は実に悪いものであつた。相当苦心をして二三十米下るとまた雪渓になつてとても大きなベルグシュルンドがあつて容易に越せない。また無理に雪渓を下るのは考え物なのでここから岩壁をよじ登つて奥穂高に出ることにした。登るに従つて

急にはなるが足場はよくなつて来た。突然上の方で板倉の鋭い叫が聞えた。ハッと思つて見ると大きな岩が落ちて来る。無意識的に左の方によけたら約一尺位横をうなりを生じて落ちて行つた。若しあの時右に避けたら岩と一諸に三人はひどく落ちたに違いない。山稜は次第に近くなつて来た。最後の一枚岩の岩壁のヒダを伝わりながらようやく奥穂高から西穂高に行くグラートに出た。午後六時半であつた。霧はなお深く少しも見当がつかない。間も無く奥穂高の頂に立つた。ちよつと霧がはれて空沢の深い谷が見えた。ここからは何度も通つた道なので前穂高へのグラートを伝つた。これで漸く危地を脱したがしかし今夜はとても上高地には下れないので野営と決した。ここで皆かなり疲労を感じた。このグラートの最低部に達した時には全く暗くなつて山ランプがないので前進は出来なくなつた。午後七時半であつた。ここから少し岳川の方に下つた這松と雪のある所に野営することにした。雨のために焚火に苦心し約二時を要して完全に燃すことが出来た。熱いテイーのおかげで身体も温まり僅かに残つた半斤のパンと半分のウルストを皆で分けた。満月に近い大きな月が穂高の岸壁を照して輝いている。焚火の廻りに横になつたが傾斜が急なので転がりそうになる。眼の下には上高地の溪谷が青白い月光を浴びて静かに眠つている。梓川の白い流れは夜目にもはつきり見える。仰げば穂高は依然と聳い空の中に満山に月光を浴びて黒銀色の大鉄壁の如くに見える。所々に雪溪が一際目立つて凄い位に銀色に輝いている。限りなき静けさの中に山は黙々と眠つている。憎しみもねたみも不満もない何という自由の姿だらう。総ての人間の小さな感情を超越した姿だ。さつき落ちたクローアールの雪もはつきり見える。若しあの時六人共に死んでしまつても山は矢張り今と少しも変らない姿で月に照らされながら黙然と立つているに違いない。自然が自然自身との幾千年の長い間の闘争を考えて見る。強暴な風雪と氷との試練に戦いつゝも運命に忍従して来た山の姿にはどうしても頭を下げずにいられない崇高さを持つている。そしてまた躍り上りたいような若々しい力を感じる。すべてを忘れて穂高の聳い岩壁を見上げた。山男の有難さをつくづく感じないではいられない。いつの間にかうと〳〵と寝てしまつた。

翌朝は紅茶一杯を飲んだきりで七時前に出発した。前日来の疲労と空腹のためにここからまた前穂高まで登るのは無益な精力の浪費故直ぐに下つて見ることにした。約二時間ばかりで岳川の雪溪のつき当りの大滝の上に出た。この辺は皆六角の柱状節理の正しい岩層で加うるに逆層なので殆ど手足のかけようがない。止むなく左に巻いて滝の横を廻り最後の六角柱を滑り下りて十時過ぎに無事本雪溪の上に降つた。ここまで来ればすべての前途の障害は無い。しばらく休んで飛ぶように上高地へ向つた。十一時半に河童橋に出た。橋から穂高を振りかえるとも深い雲に巻かれて頂きは仰ぎ得なかつた。

西穂高のコルから奥穂高への山稜——恐らく上高地に入つた誰でもきつと一度は注意して見上げたであろう——の登攀は随分興味の多いものと思う。ことに奥穂高に近い所の二つのジャンダルムのあたりは岩登りの練習には好適の場所と思う。夏の登山がクレッテライの方面に向つて来た今日あのあたりは見逃すことの出来ない場所だと思う。鎗穂高の縦走も奥穂高から前穂高へのグラートは余りに平凡過ぎる故奥穂高から道を変えて西穂高に向うなら今までの道より遙かに興味があることと思う。このグラートに要する時間はあのコルから奥穂高までは五—六時間は要すると思う。下りならもう少し短縮されると思う。板倉とも話したことだが槍の北尾根から北穂高、空沢、奥穂高、西穂高への道は殆どみな岩登り許りである故きつと興味あるに違いない。若し途中に気持のいゝ小屋でも出来れば非常に具合がいゝ。今年は是非やつて見ようと話していたがついにそれも出来なくなつてしまつた。すべては運命なのだ。

松方がベルグシュルンドに落ちたために止つたのは如何にも運がよかつたことと思う。あの時の雪溪の様子が前頁の図のようになつていたからであると思う。

（大正十二年五月記）

◇ **年次晩さん会** 十二月十日（木）午後六時から国際文化会館で行われた。参会者七十余名。日高会長を皮切りに藤島敏男、深田久弥、高木菊三郎、冠松次郎、クリシュナ各氏の話があつた。

続「マナスル」に対する海外の反響

マナスル報告書
編集委員会

会報二〇〇号に「マナスル—一九五四〜六」に対する海外の反響を報告したが、その後も続々として各国からメッセージが届いているので、これらの中から代表的なものを引続いて紹介する。

◎ポール・モネット氏から……在ブラッセル・ベルギー山岳会

拝啓、本会宛郵便にて御恵送下さいました立派な書物受領致しました。御高著はその記録的価値は申すまでもなく、芸術美上からみましても高く評価されるべきものと存じます。本会の図書室の常連にとりまして多大の共感を与えるものと存じます。

さらにまた、今回の御好意におきまして、さらに大きな価値を与えるものは、これこそ全世界の山岳会を結合する密接なきずなのシンボルであることであります。

理事長 ポール・モネット

一九五八年十月三十日

（近藤 等氏訳）

◎テイルマン氏から

貴紙の御親切によつて日本山岳会の意義ある「マナスル」の報告書を贈つていたゞきましたことは大変な驚きであり嬉びでもありました。

私は勿論、われわれのジャーナルで貴方の不撓不屈な頑張りと最後の成功を感嘆をもつて読んで知つておりました。そして今回、この歴史的記録の一冊を贈られたことを大変光栄に思っております。末筆ながら貴方の仲間の方によろしくお伝え下さい。

槙 有恒様 敬具

◎オバーリン氏から

ヨーロッパの旅行から帰つてきまして、私は貴方の御親切によつておくられた非常に見事なマナスル報告書に接しました。それは日本山岳会がマナスルへ送つた遠征隊の見事なシリーズが、貴方のリーダーシップのもとに完成された記念でもありました。この詳細な報告書は過去数年間にわたつてのわれわれの興味ある接触とロンドンにおける短かつたけれども楽しかつた会合の回想にもなることでしょう。

貴方は青年時代の真に偉大な登山をふりかえることができるばかりでなく、また今やマナスルへの最後の登山のようにエクスペディションの指導を与えることもできるという事実によつて、自ら得た多大の満足を覚えるに違いありません。

貴方の指導のもとに日本山岳会が引続き数々の成功をなしとげることをお祈り致します。

十月二十七日

アメリカ山岳会会長
ジョン・L・オバーリン

槙 有恒様

その他

オランダ山岳会、ネール首相、ヘンダーソン夫人からも心のこもつた礼状が、またマザマ山岳会か

らも「ネパールへの遠征隊にとつて本書は、将来極めて役に立つことでしよう」という言葉で結ばれた長文の礼状が届いている。

私達本書の編集委員会一同もこのように海外から寄せられてくる讃辞には少なからず驚ろいている次第である。本書に集められたわれわれのさゝやかな経験の集積が、マザマ山岳会の云うように各国の遠征隊にとつて、少しでも役に立つことでもあれば、それは望外の喜びというところである。

（三三、一二、三一松田）

金山村行心覚え

木暮 友枝

三年このかた心がけながら、果さなかつた金山壮行を今春は決行する積りでいた折柄、神谷様のお誘いを受け、五月廿四日午前九時卅分浅川発との御報らせ。支度という程のことは無くても、二三日前からソワソワして暮す。前夜は若い頃の遠足の時のようなたのしみで、昔のような想い出にふける内やがて夜が明ける。

起床、快晴、身支度をして、父の碑に初対面させる心で、亡児の写真二枚を帯のかくしにひそめる。美枝子同行なので行動に心配は無く、浅川に着く。むこうのホームに神谷様が手を挙げてお待ち下すつた。野口様、原田様、沼井様、山崎様、市村様、一柳様、中川様が前後してお集まりになり、神谷様私等と十人いよいよ出発する。珍らしいことには、車内が大変空いていて、この頃の車はみんなスシ詰めとばかり極めている私には、昭和十二年頃の長野行夜行を想い出させる。神谷様はよくこんな都合のいい列車を御存じのことと感心する。汽車の進むにつれて、左右に見える山々、あれが八カ岳、こつちが甲斐岳と教えて頂き、富士山も遠望して、笛吹川かと思う広い川の鉄橋も渡り、甲府を過ぎて韮崎に着く、十二時三十二分。ここで若いお方が一人お加わりになる。

こゝから増富温泉までバスでの登り路、岩の多い本谷川の渓流に沿うて進む、青葉新緑の繁みから覗く赤つゝじのいゝこと、また谷の底に立つ高い木に、藤の花房が紫に垂れていてうつくしい。私は毎年五月六日、多磨墓参をするのだが、沿道の右側に、深い樹の多い谷があつて、そこに立つ巨木に藤蔓がてつぺんまでからんでいて、沢山の房をたれている風に揺れるさまは紫の雲でもなびいているかのようで、ちようどには、五月幟りがまだおよいでいるし、空には雲雀が囀るし、何か引かれるような気持ちで墓地まで歩く。ところが二年程このかた、その谷の整理がはじめられ、樹木も少なくなり藤蔓も何処かに降されてしまい、まことに惜しいことと思つている。それで今、金山行の路に、木にからむ紫の花と、村の旧節句の五月幟を眺めて、何か取かへし物をした心である。バスは恐ろしい程、深い谷川の岸を縫うかと思えば、すぐ眼の前を流れが走つて、岩づたいに向う岸に渡れそうである。一時間三十分であろうが、増富に着く、そこから私達のためにハイヤーを頼んで下すつたので、神谷様、沼井様、山崎様と御一緒に落合まで走る、その先の道は川に添うたなだらかな登りなので、少しも疲れず、こわれた橋や、川に横倒しの樹や、崖の花や、すべて珍らしく歩く内、パーツと目の前が開けて広い原に出た。金山村である。白樺が立ち落葉松の苗木が群をなして、若葉が花のように白く見える。遠くにバンガローが沢山玩具のようである。青空を背にした瑞牆山のいい容（カタチ）だこと。ここには写真をする方、スケッチをする画家さんに、沢山の材料がある。ただ私達はうつかり休んでいると、撮られそうでまことに心配、東京では若い甥などに向けられると、一寸待つてと逃げるのだけれども、お山では撮影御免という掟かもしれない。ここまで登るとさすがに肌寒く、美枝子はスーツ、私はセルに羽織の支度だが、ネルジバンやセーターを、手提げに入れて来てよかつたと思う。やがて増富からの歩行者とも御一緒になり、有井館の方達の迎えも受けて、茅ブキの家に着く。ここで皆さんは靴も脱がれず、お茶も上らないで碑に案内して下さる。水のザアザア流れ落ちる傍に、道しるべが立ち、登り道で私は脱げやすい草履を踏みしめて辛うじて碑前に着く。はじめてまのあたり見る碑は好適な台地を前に、かなり高い黒い岩に抵められてある、山の花を捧げて下さり、神谷様の厳粛鄭重な御奉告があり、ついで沼井様が懇な御追憶のことばと「日本山岳会五十年史」をささげて下さる。誠に御誠意にあふれて、伺つている私は涙を催す程である。私、美枝子、みなさまの御礼拝があり、私は不調法なので美枝子に一と言お礼を述べさして頂く、しかし感謝の言葉はいくら述べても尽きないであろう。このふさわしい高い高い場所を探し選び、重いレリーフを運んで建碑して下さつた皆様の当初の御苦心と、心から御礼を申上げたい。本当にまたとなき静寂ないゝ場所で「山の上にわれ一人居る静けさの時経にければ雪崩はきこゆ」という木暮の歌が心に浮ぶ。こゝで一人しづかに仏法僧や不如帰の声をきき、山々をながめ、星座をみ、花の匂いをもたのしむであろう、いい場所である。ついにところを得たるよろしさ、という下の句をも思い出す。昨年ここに掲げて頂いた碑誌は、松方様の御文案で、白地にハッキリと黒文字明瞭で、いつまでも消えそうにない、名文だなあと皆さんが感心なさる、私もそう思い暗記して置かねばと思う。

式を済して有井館の座敷に上る、床の間に大きい石楠花の花ざかりが活けられ、違い棚もあり長押もあり、天井も高くて、部屋の数も十ほどとか、お台所は遠いらしい。

日もようよう暮れて、昔なつかしいランプの下で夕食おさかもりが始まる。その豪華なこと、板わさにシューマイ、珍らしい佃煮等々、罐入りの熱燗で眼やかに、お話もはづんで、私達はお炬燵にあたり、御馳走に預りながら大変面白く拝聴させて頂いた、宿のお膳も山菜でおいしく、御飯が上手に炊けている。久しぶりにおヘツツイでマキで炊いた御飯を味わうわけである。ここのおばさんは御主人も健在、あととりのいい息子さんがあり、よく働くお嫁さんもいて幸福な上に、御自分も丈夫でよく働き、客人にも親切、お膳にのぼす山草を摘つたり、畑をしたり、その上ハタも織り、戦後東京では見かけなくなつたくづ糸織の帯を織つて、田舎の娘さん達をよろこばせているそうな、二、三本出来たのを見せて下さる。本当に生き甲斐のあるおばあさん生活で、木暮の碑についても心を配り、碑前の花木立に手を入れたり、休み場を高台に一つ見つくろつたり、ありがたいことである。

十時頃就寝一とねいりして、一時頃目覚める、水の音が聞え仏法僧が頻りに鳴き、屈托の無いいゝ真夜中である。ブッポーブッポーと二時三時まで鳴き止まず、それが終つたと思うとキャッキャッという鳥の声がする。あとで伺うと不如帰でテッペンカケタカと鳴くのだそうである。障子の硝子から覗くと、金峰山の上に実に大きい暁の明星が光つていた。四時に出立される登山の方があるので、みんな起きてしまう。野口様、沼井様、原田様富沢様方四人で小川山に登られるので、きようも快晴でお仕合せ、リュックを背負われた後姿をお見送りする。晴れた山村の朝は心持ちすがすがしく、山から流れる豊富な水で洗顔、使い水

はどんどん低い方へと流れて行き、都では味えぬ水の恩恵である。

朝食の後、八時頃神谷様、山崎様は瑞牆山登りに御出立、目の前のあの岩山も登れば遠く骨が折れるのであろう。私達は石楠山岳会の方お三人と下山の積り、石楠花、わらび、山うどなど沢山のお土産を頂き、おばさんに送られて出かける。途中まで御一緒に八ミリを撮られた方達は増富まで歩行で、先に進まれる。天気はよし、下り道で木色も珍らしいので、美枝子も歩いてみたいようにいうけれど、ハイヤーが約束してあるので、落合でまつ、橋のたもとの事務所に休ませて貰つている間、おばさんは一寸出て行つて山うどを沢山とつて来て下さつた。車が来ておばさんに左様ならをしたがこのかたはこれから唯一人で寒風に吹かれながら金山まで帰られるのだ。

増富の不老閣に着いて、お三人に迎えられ休憩してお茶をのみ、入浴をし昼飯の後、十二時三十分のバスで韮崎に下る。東京行きの汽車は登山帰りの人達で混んでいたけれど、幸いよい席をとつて下すつて、安心した。とりわけむこう座席の市村様は本郷千駄木町おすまいの方で、私等蓬莱町居住の頃からのいろいろを御存じで、あの曲り角の大銀杏や、禅寺のこと駒本小学校のことや、お話していると面白く、駅々の名も心付かずきり午後六時であつた。いい旅をしたと思います。

（編者附記・筆者は故木暮理太郎氏令室、昭和三十三年五月の碑前祭の印象記で、神谷恭氏にお願いして掲載することになつたものです）

続ヒマラヤを越える白鳥

松田雄一

ヒマラヤの白鳥に興味を持ち始めてから、私は多くの人から御教示を得て、大変楽しい日々を送つている。そしてあの原稿を書いてから一カ月以内に疑問と思われる数々の疑点が解つてきたことを嬉しく思う。中央アジアには数多くの渡り鳥がいるらしく、これらの渡り鳥はツァイダムを越えもつと遙か北のシベリヤまでも行くこともわかつた。

ハズルンドの「蒙古の旅」には「十日の第一日曜日。黄昏と共に河の流れについて飛ぶ渡り鳥の羽搏きの音が聞えてきた。最初に草原の鵠が来て、数千の群をなして樹梢の上を円を描いて飛んだ。次に野鴨がやつて来、最後に日が殆んど暮れてしまつてから、野生の鵞鳥や白鳥の笛のように長く引いた鳴声が聞えた。時々星を鏤めた空を背景に、一群の白鳥が堂々たる編隊で飛び過ぎるのを影絵のように瞥見することさえあつた。

また第十四章には「亜細亜の渡鳥」という一章があり、エツインゴルの北、ガシコンノール湖で出遭つた光景を感激的に書いている。「あの塩の高い白い山から見た光景を私達は一生忘れないだろう。——即ち亜細亜の渡り鳥が温暖な南の国へ行く途中そこに集合して翼を休めていた。水鳥の群は青い湖面に黒ずんだ島のように浮んでいた。鸚鵡の様に斑な鴛鴦の群は、鈍い灰色の雁の中に花壇のように見えた。そして鳥の形づくつている『群島』の遙か向うに、雪白の白鳥は他のものをよせつけないで、厳かに波間に揺れていた。渚にはこうのとりが気取つて歩いており鶴は足を高くあげて踊つていた。私達が空に向けて一発放すと、その轟音が消えるか消えぬ間に、無数の鳥の合唱の呟きが、騒々しい漸弛音にまで高まつた。全群が湖水から飛立ち、空に散り〳〵になつたが、飛ぶ余地を見付けるや否や、次の数千羽は水から飛び立ち、空は羽ばたきする翼で暗くなつた。益々高く遠く鳥の群は広がつていき、同時に湖からは新手の大群が送り出された。一瞬間に天さえも蔽われてみえなくなり、大気は喧騒で震えていた。しかし間もなくこの紛乱に秩序が出来始めた。あだかも命令によるもの〻如く数多の種類の鳥はめい〳〵別の群に整列して、はじめ飛立つたそれぞれの領域の上を旋転し始めた。最早危険がないことが判ると、最も大胆な鳥は再び湖水に舞い下り、各群は間もなく彼らの指導者の例にならつた。たゞ白鳥の羽のみは彼らのこう惚たる歌で私達を魅惑しつゝ、旋転しながら飛翔を続けた。長い間湖からはさわぎが聞えていた。それは鳥どもが何の原因もなく警報を発したことを互に叱り合つているようであつた。」

何と素晴らしい、印象的なシーンであろう。十月の第一日曜日といえば、丁度モンスーン明けの完定期に一致する。これから推定すると彼らはヒマラヤの山麓にまで来て待機するのではなく、遙か北の国から一気にヒマラヤ山脈を飛び越えてしまうのかもしれない。金坂、石坂両氏に帰国後この白鳥について尋ねたところ飛翔高度はマナスルやマルチュリよりも遙かに高いというから九千〜一万米近くを飛ぶらしく、逆V字型の一カ編隊は五十羽以上の編隊からなつているようである。しかし彼女らが一気にヒマラヤを越えても行先はどこか、さつぱり見当がつかない。白鳥にはあの冬でも暑い印度の平原では暑すぎるように思われるからである。なおハズルンドのみた白鳥が中央ネパールに来るかどうかもわからない。コースが大分斜めになるので、この辺に飛んでくる白鳥はアルタイ山脈からコブノール、ガスノールなどを経てくるのかも知れない。

一方私はプレ・モンスーンに越える白鳥の記録を探したが、なかなかわからない。或る日、東大動物学教室の渡り鳥研究会と記された手紙が舞いこんできた。これ幸いとばかり封を切つてみると、それは成瀬氏のいたずらであつた。幸いなことに成瀬氏の御教示によりノルマン・ハーディーの「In Highest Nepal」より若干ヒマラヤを越える渡り鳥に関する知識を得た。その七章中には「鵞はヒマラヤではよく見かける。ドゥドゥ・コシ峡谷の上で、私は一カ月間もの間、毎日一組の大きなこの種の鳥を見た。二一、〇〇〇呎の高さを一時間もかゝつて私の廻りを輪を描いていた。この季節に、この高さには四足の獣は住んでいないのにその上空を飛んでいるのは不思議なことだが、実は彼らは、チベットへの高い峠を越え疲れた渡り鳥をまつてパトロールしているのである。三月には何千もの鳶が国境の峠を越えてインドから北へと飛んでいく。四月の初めには無数の鵞鳥がV字型の編隊を作つて暖かい地方から北のモンゴリヤやシベリヤえと峠を越えていく。一方、つぐみ、雲雀や雉たちは春の訪れと共に、雪線の後退するにつれて皆、上へ上つてくる。しかしながら彼女らのうちの弱い者は屢々用心深い鷲に発見されて餌食に供される。そして秋になると彼女らは皆南へと帰つてくる」とある。この鷲というのは私達がニヤックの裏山やチユーリング・コーラの谷でみた大きな鷹(?)と同じ種類のものであろう。しかしこれを読むとプレ・モンスーンの安定期に至る遙か前に既に一部の鳥はヒマラヤの比較的低い峠を谷沿いに越えているらしい。白鳥のように高所を飛べない鳥達は、時間をかけて渓谷沿いに、鷲の脅威を受けながら越えていくのだろう。しかし高貴な白鳥達はやはりポスト・モンスーンの場合と同様、八千米の高所を一気に飛び越えているのではないだろうか。早くこの眼でたしかめたいものである。

（三四・一・一）

会員訃報

亀岡英一氏（会員番号二三四一番）腎臓しゅ瘍のため昭和三十四年十一月二十二日永眠された。亨年五八才。三井信託銀行常務。

図書紹介

奥秩父研究

原全教著

奥秩父の精通者、原全教氏が、昭和十六年に朋文堂から出版された「奥秩父」の大部分と、「多摩秩父、大菩薩」とを合併したものを一冊に纏めて、「奥秩父研究」と題されて、再版されたものである。秩父の森林美を象徴する表紙カバーの装幀は石川正夫氏で、グレーの色が秩父の山や谷に調和して、渋い感じがいかにも秩父的な感じがする。口絵写真はその殆どが秩父の清水武甲氏のもので、両神山をトップに、山々、渓谷、山小屋、里として紹介してあるのも、変つた試みである。

内容は奥秩父の範囲、記述方針谷歩き記録、時間記録、道しるべについて、距離と高度、地名の考証、史実と民話など、参照地図、古書の引用、登山コースなどの説明に始まつて、甲武—甲信境主脈雲取から金峰までから、秩父の深山幽谷特に渓谷美を誇る、秩父の沢歩きルートが詳記されている。

刻明な沢附近の付図が十五葉挿入されているのは秩父党にとつて地名や沢名を知るための指針となるだろう。これはあくまでも案内書ではなく、地域研究書であると著者は巻頭で説明しているが、文末のコースタイムは、氏の時間記録として大いに参考となり得よう。秩父の山旅には山里の民俗に深いつながりがあることをあとがきに記されているが、登ることのみにはやる近頃の登山者層に、秩父の山里を分けて、深い厚生林の奥山の渋い味を、知つて欲しい……という無言のひびきが感ぜられる。

丹沢、谷川、南北アルプスなどは足繁く歩いている人達も、秩父には弱い。日本の山の真実の残されている秩父を知るのに、これは良き著書であると共に指導書でもある。

一九五九年七月三十日　朋文堂発行、五〇〇円　（T・S）

針ノ木岳

大町山岳博物館編

「自然とその保護」と副題されたこの好著は、黒部川電源開発工事の進捗に伴う自然の変貌と、観光開発によつて、失われ行くこの地域の自然の生態を調査し、針ノ木自然園の構想を立てる趣旨で編集され、第一部保護（自然園の構想、スキーと自然）、第二部自然（気象、動植物の生態とフアウナ、フロラ）にわけ、詳しい針の木周辺開発年譜を附録とし、多数の写真と図表を添えてある。

「アルプスのまち」としての大町市の山岳博物館が、卒先して多くの関係者を動員し、良心的な調査の結果をまとめられた労を多とし、さらに調査を進められることを期待する。「スキーと自然」の項（福岡孝行氏）では、登山路のつけ方や雪崩に対する遭難防止についての考察があるが、トンネル開通による交通の容易化に伴つて、初心者を含む多数のスキー客が来集する点を考慮して、いま一段の対策を練る必要があると思われる。

B5版、本文一六〇頁、附録一〇頁、一九五九年六月、大町市役所商工観光課、大町市教育委員会発行、非売品。（日高記）

秘境ブータン

中尾佐助著

一九五八年、幸運にもブータンをさぐつた中尾氏が、帰国後毎日新聞紙上に連載した紀行は当時大変面白く読んだが、それをさらに詳しく一本にまとめたのが本書である。

著者は植物学が専攻だから、植物についての描写が多いのはいうまでもないが、それ以外にも人文自然のあらゆる面に亘つて、いわゆる探検家的貪婪さで多くのすぐれた観察をし、しかも誰れにも判り易くかつ興味がもてるように書かれている。紀行文学としてもすぐれたものと思う。

ここではブータンの山のことについて、この本の中からふれてみよう。「チョモラリはブータンでいちばん有名な山だ。……この山だけが、もう西洋人の手がついている。しかし、ブータンの他の山はまだ全く何一つ登山家の間に知られていない。まだまだブータンにはたくさんのヒマラヤの巨峰がある。最高峰といわれるクーラ・カンリは、はるか中央ブータンの国境だ。ブータンの国には登山家のための山がまだうんとのこされ

武井直澄氏逝く

武井君は昔の上野の美術学校を出た鋳金家であるが、私達古い山仲間には山登りの変人と云う印象が強いのみである。武井真澄と云う名を覚えている会員は、もう幾人もあるまいが。

鋳金界の名人として、つい幾年か前になくなつた、香取秀真（ホズマ）氏とは同窓である。武井君がわれわれ山仲間と知つたのは、確しか三枝君（守博）中村君（清太郎）等が常念登りの時は、山の中で悪天候にさまたげられて難行苦行をした時に行き会つて懇意になつたのが始りと思う。何んでも余程乱暴？な山登りを敢行する野人的行動家であつたように記憶している。

氏の大人はその頃（明治の中葉）信州伊那郡の郡長か何かしていられた人で、武井君は美校を了えて、その頃の松本の中学校の先生をしていたが、私も一二度、松本の源池と云う所に訪ねたことがある、大きな胸像（誰れのか知らない）が少さな玄関に飾つてあつたのと、自筆の山の水彩画を沢山見せられた記憶がある。

これ等は明治の終り頃の話である。その後上京して万年筆屋をやつたり、二曲双の山の水墨画を画いたりしたいが、要するに専門の鋳金家としては、私などは知らない。「山岳」の第五年の表紙「植物帯」と題する図案は武井君の作である。また以前の会のバッチの三角形のもの（今、副章にしているもの）は武井君の作である。因に現在のバッチは後年武田君（久吉）の作になるものである。

武井君は会員になつていたかどうか記憶はないが兎に角われわれ老兵共は山の仲間として、おつき合いをしていた。戦前は信州洗馬駅に隠棲して絵を画いていると聞いていたが、戦後の或日突然訪ねて来られて、久濶を叙したが、その時「君もメガネを掛けるようになつたかね、僕はまだ針のメドにメガネなしで糸が通せるよ」と自慢していたが、その時私は七十を越えていた。私は余程若輩と武井君は考えていたのであろう。

昔の「高山深谷」の表紙に、香取秀真氏の山ナタと熊の焼印を用いた、あれは武井君が香取さんに頼んでくれたものだ。

最近同君が三年前に逝去したと聞いたので聴きたくして次のことがわかつた。

「戦後一時健康を害しておりましたが、世の中のおちつきと共に元気になり、そして制作やら登山を楽しんでおりました、時折少し足をのばして浅間温泉の裏山より袴越、高ボッチなどへ登り、八十才の時大滝山へ登つてよろこんでおりました、東京在住の子等が高齢を心配して東京移住をすゝめましたので八十才の秋十一月原宿へ移つて参りました、間もなく千葉県柏市に移り三十二年六月三日脳出血のため他界致し遺骨は郷里諏訪市豊田に埋葬致しました。生前の希望通りには参りませんでした。云々」

これは、武井小千代さんからの手紙の一節である。古いものは漸減する、山の巨木の如くに、古い山友の思出を語る。（高野　鷹蔵）

ている」と、著者はチョモラリを訪れたときにブータンの山の概要にふれ、滞在中折を見ては山地への旅行をこころみている。

チョモラリについて青いケシの花を求めてリンシー・ゾンへおもむき、第一日目に久し振りの快晴に恵まれ、「昨日まで雲のほか何も見えなかつた緑のゆるやかな丘の上に、びつくりするほど間近に氷の山が二つそびえている。ツリム・コンとギュー・コンだ」と感激しながら「文明人のいまだかつて見たことのない山々」の大観を恣にしている。ツリム・コンは七三〇〇米、ギュー・コンは七〇〇〇米ぐらいと著者は伝えている。

さらにシンチェ・ラを越え、タカ・コンの未知の七〇〇〇米峰に接し、その麓のラヤの村はエベレストの下のナムチェ・バザールのように、将来はブータン・ヒマラヤの登山の根拠地になるであろうと判じている。

著者はその後死の谷の廃都と化した旧首都プナカを訪れ、東進してブムタン地方に足を延し、往昔のチベット道をとつてブムタン・チュウの源頭まで溯り、クーラ・カンリ（七五六九米）に接し見事な写真をもたらした。「四千九百メートル、ムナカ・チュウの氷河の峠に立つと、クーラ・カンリはついに秘密のベールを脱いで、私の真正面にそびえ立つていた。青黒いチベットの空の下に、巨大な白壁の姿はまばゆいばかりに輝いている。……東に連なる国堺の山々は氷の板を立てかけたようにけわしい。たれにも名さえ知られず、たれにもその姿を見られたこともない山々は、いま白日のもとにその姿をいつぱいに広げている。はるかに東部ブータンの山々がさざ波のように起伏している。その間に無数の氷河が白く光る。その一つ一つが、そしてその全体が偉大な未知の世界だ。果てしれぬ広がりを前にして、私はかたずをのんで見まもるばかりであつた」というあたりは、本書の山の記述のまさに圧巻と言つていいだろう。今後日本からブータン・ヒマラヤへの本格的な登山隊が出されることを期待する。

巻頭にまとめられた写真は八十余葉、どれも皆見ごたえがある。内五葉の原色版はやゝ印刷が劣りまた山の原色写真がないのはいさゝか物足りない。本文にも写真・地図が多いのは楽しいが、印刷の不鮮明なものがあるのは残念である。しかし全体としては近頃珍らしい興味ある探検記である。

（B6版三一五頁、昭和三十四年十一月毎日新聞社発行、三二〇円）　（望月達夫記）

The Himalayan Journal volume XXI, 1958

最近のアクティヴなヒマラヤ登山を反映して、極めて豊富な内容になつている。

八千米峰の登頂記としては、ブロード・ピークとチョゴリザ一九五七年（クルト・ディームベルガ）ガッシャブルム一峰登頂（T・マコーマク）の二編。前者にはラッシュ・タクティックスによるブロード・ピークの登頂とチョゴリザにおけるヘルマン・ブールの最後が述べられてあるが、マウンテン・ワールド一九五八～九年にも一層詳しいこの紀行が見える。後者は別名ヒドン・ピーク、一九五八年米国隊による最初の八千米峰登頂で、これによつて残るところはドーラギリとゴサインタンのふたつだけになつた。

そのほかカラコルムの登頂記としては、ラカポシ・クライムド（マイク・バンクス）は英国とパキスタンの軍人の合同登山で、ハラモシュ登頂（H・ロイス）はオースタリー隊。チョゴリザ登頂（桑原武夫）については申すまでもあるまい。八頁にわたつて述べられている。

マッシャブルム一九五七年（J・ウォームズリ）は頂上直下百米ほどの地点まで迫りながら、慎重を期して退却したマンチェスター登山隊の記録。その勇気は賞讃さるべきだが、この隊は不幸にも頂上攻撃以前に、副隊長ロバート・ダウンズを肺炎らしい病気で失つている。いつたん一万呎のジャングルまで下ろされ、回復したので再び行動に参加したとき、二万二千呎の第四キャンプで急に悪化して不帰の客となつた。ヒマラヤにおける肺炎の恐しさを如実に物語つている。もうひとつ、悲劇は、ミナピン遠征一九五八年（デニス・ケンプ）における英国隊で、隊長のT・ウォーとC・ホイトとが頂上攻撃に向かつたまま再び帰らざる報告である。

一九五七年A・グレゴリ率いるところの、ディステギル・サール（デニス・ディヴィス）はドカ雪による敗退記で、インピアリアル・コリッジ遠征隊一九五七年（K・J・ミラー）はE・シプトン率いるところのシアチェン氷河踏査記、トウィッツ・ピークという二万一千呎ほどの山に登つている。

カラコルムの記事からパンジャブに移れば、ギュンディ及びバラ・シグリ一九五八年（J・ライナム）、デオ・ティッバ及びインドラサン一九五八年（R・G・ペティグルー）、チャンバーラフール一九五八年（F・ソラリ）等の踏査記があり、ほかに覚書欄にも、ラフールの旅一九五八年（G・ジョウンズ）があり、第一九五回の小集会で三田さんから話を伺つたクル溪谷の奥の山々の紀行である。ちよつとした氷河の山がふんだんにあつて、しかも十分に探ぐられていないということはまことにうらやましい限りだ。

ガルワルでは一九五八年にムリグトニ（A・アリ）というトリスルの近くの二二、四九〇呎峰を印度隊が登つている。

ネパールについては、ジャヌー偵察一九五七年（ギド・マニョーヌ）だけしか見られず淋しい。登頂の可能性はヤマタリ側以外にはないと結論しているが、このルートといえども恐しいクライミングのようである。

ヒマラヤ山系以外では、英国のコーカサス遠征一九五八年（レイフ・ジョウンズ）が見られる。J・ハント率いるところのコーカサスにおける戦後最初の外国人登山隊である。

覚書欄では、一九五八年のガッシャブルム四峰（七千米級の最高峰）におけるイタリア隊登頂の概要がF・マライニの資料によつて述べられ、別に追悼、書評等。

本文一六七頁、写真版六八葉、地図一一葉、価格一四ルピー（千六十四円）。バック・ナンバーでは十七～二十巻が在庫し、各七ルピー半で申込先は The Hon. Librarian, The Himalayan Club, P.O. Box 9049, Calcutta 16, India 十六、十七巻は Blackwell's of Broad Street, Oxford, England に在庫している。（金坂記）

戸隠飯縄山懇親山行

十月十日

仕事のため一日遅れて、十二時十五分、準急白樺で上野を発つ。長野で乗替え、やつと山へ行く気持になつたが、戸隠行のバスに乗込むとそのまゝねむりつゞけ、肩をたゝかれて気がついたら戸隠中社に来ていた。

眠つていたのを急に起こされたので、不愉快な気分からぬけきれない。歩いているうちに気分が良くなり、八時すぎ戸隠小屋に着く。今日戸隠山へ行かれた神谷さん石原さん、加藤さんに話をきく。

十月十一日

柏原に廻られる神谷さん、石原さんとお別れし、私たちは飯縄山に向つた。

一旦中社に戻り、から松林の中のゆるい尾根道を登る。戸隠山に雲がかゝつた。私達のほか誰もいない。十時飯縄山に着く。

霊仙寺の高原に出て、すゝきの穂の白く波打つのを見たとき、更に強く秋を感じた。

参加者　神谷、石原、加藤、黒木、西川　（西川記）

会務報告

十一月理事会　五日

▽場所　本会図書室
▽出席者　日高、太田、金坂、千谷、山崎、川上、田村、越智、日下田、古沢、松丸、高橋、岩永

①年次晩餐会の件、十二月初旬開催
②第二〇一回小集会の件、雪崩について十一月十七日、講師、大井、山田、木下の三氏
③入会申込者の件、今後は理事会にて慎重にきめる。
④技術者講習会の件、文部省よりの補助金により浜野、金坂、日下田、徳久、折井、信濃支部一名の委員会により準備にあたる。
⑤神戸大会山岳会第二回日チ合同探検隊後援依頼の件、承認す。
⑥高校体育連盟（三五年八月）福岡山岳連盟（三五年五月初旬）立山周辺登山に講師派遣の依賀あり
⑦山岳協会問題について、岳連の次期外貨割当などから協会発足は三五年五月よりとの要望を出した
⑧ヒマラヤ遠征隊の装備を記念として一式将来のために保存したい
⑨体協役員との懇談会の件、十二月初旬会合を開く予定
⑩セルバン・シューズ検定の件、一般登山には良いが厳冬期には不適である旨の書類を作り去年の分として検定料、金五万円を受取る今後は上記検定の条件を表示するよう要求する。
⑪京都学士山岳会、社団法人申請の件。

南の山靴とスキー用品

登山とスキー行に一番主要な役目を持つ山靴とスキー靴はミナミ独得の技術最高の材料で作つたものをお奨めします。

テント
スキーと山の服装
キスリング
サブザツク
各種取揃

スポーツ用品

ミナミ

神田小川町中央角　TEL (29) 1359

T. S. FLAVOUR

楽しい登山に　スポーツに！
グット一杯美味しいジュース
本品は水にとけやすく携帯に便利です。
一杯宛ポリエチレン袋に入っています。

土谷商事

東京都杉並区大宮前6ノ340

登山用具の専門店

好日山荘

中央区銀座西二ノ五
TEL 京橋(56) 3600

カタログ進呈

小里頼忠）

第十四回国体登山

日高信六郎

第十四回国体登山は奥多摩町を起点として雲取山を中心に展開された。天候にはあまり恵まれなかつたが、下山日の早朝はよく晴れて遠望が利き、遠来の選手を喜ばせ、最終日は奥多摩湖畔の好日を楽しんだ。開催直前二回の台風による立木の被害が甚大で、あちこち縦走路が閉ざされたが、水源林事務所の努力によつて支障なく歩るけた。また東京で見られたような冷淡な無関心が懸念され、実行に当つた都岳連の諸君にも苦心があつたようだが、公私方面の熱意が漸次高まつて気持ちよく三泊四日の行事を終えることが出来た。

各県選手の素質技術に差があるのは国体の性質上止むを得ないことだが、年ごとにその違いが少くなるのは喜ばしい。しかしその態度や心違えに遺憾の点を見られるものがあつたのは残念である。七つ石小屋と雲取小屋の中間に新らしく奥多摩小屋が建つたのは、今度の国体の遺産として登山者に喜ばれるだろう。

町では精一杯の歓迎振りで、郷土芸能の車人形や鹿島踊りから奥多摩音頭に及び、こちらからもお国自慢の芸づくしが出て交歓し、閉会式のあとではご馳走になつた。御好意は大いに有難かつたが若人の国体登山の本旨に顧み、歓迎が行きすぎにならないことを老婆心から希望する。

閉会式後の国体委員会には本会から折井、太田、金坂三委員が出席した。日高会長から近く日本山岳協会が発足する筈ゆえ、来年から国体登山は日本岳連の責任で運営することになると予報し、従来日本山岳会に寄せられた協力を謝し、国体の運営に当つては、全国の登山団体で各県体協に加盟しているものは一様に取扱うことが肝要であると信ずる旨を述べた。

◇**第二〇一回小集会**　十一月十七日午後六時から体協会議室で雪崩に関するシンポ・ジウムを行つた。講師は大井正一、木下是雄、山田二郎の三氏。司会金坂理事。

◇**第二〇二回小集会**　十二月五日体協会議室で「冬山遭難予防について」のシンポ・ジウムを行つた。講師、浜野正男、千谷壮之助、山田二郎の三氏、司会太田理事。

◇**東京支部クリスマス忘年会**　十二月十六日ルームで開いた。

蔵王越え

北原春子

朝から降つたり、やんだりだつた雨が、賽の川原を歩く頃、かなりのあられとなり、私達の顔をたたきつけた。川原は広く、ところ〴〵に墓地があつたりして、何となく荒涼とした感じ。もうここには晩秋の面影はない。白石からのバスの途中、ゆるやかな山裾が淡紅に、黄金色に、オリーブ色に、やわらかなハーモニーを見せていたのだつたが…、鳥の声も聞えない。川原の入口の小屋で、小さな檻に入れられた貂を見た。この辺でつかまえたのだそうだ。野兎や貂等、小さな動物達は、もう冬ごもりしているのだろうか。川原をよこぎり、谷を下り、三十分、谷間に見えてきた赤い屋根は、いかにも羚羊がひそんでいそう、かもしか温泉の名がぴつたりだつた。翌朝、豊かな温泉に疲れを癒し、気持の良いもてなしにすつかり感激して、かもしか温泉を後にする。雪の下が霜柱の山道を約一時間、自然園あたりから雪が四十センチ位。低い木立はすつかり雪におゝわれている。踏むのが惜しい程、立派なエビのシッポが現われ続く。こんな沢山エビのシッポにお目にかゝれるなんて、私達は驚いた。蔵王の最高、熊野岳の頂上付近は、ガスがひどく、風もかなりあつて、すぐ先の導標が解からない程。まつげは凍り、髪の毛は雪がまつわりつき白く凍つて、久しく忘れていた冬の感覚がよびさまされた様な気がした。地蔵岳までの間、雪が大変深く、いゝ粉雪で、急にスキーをしたくてたまらなくなつた。ザンゲ坂上から、だれも乗つていないリフトで下る。霧氷におゝわれ白くけむつて、丁度満開の山桜の様な木立、笹の葉のうすみどり、灰色の空、あの蔵王のスロープは今、淡い素朴な美しい色合をかもし出している。

十一月の終りの連休のこの山旅は静かな冬のふんいきに、すつかり私達をひたらせてくれたのだつた。

東京支部会務報告

十一月四日　理事会
1 東横デパート冬山展開催の件
2 冬期スキー学校の件
3 十二月会員懇談会の件
4 十一月懇親山行の件（二十二—二十三日、蔵王）
十二月二日　理事会
1 蔵王越懇親山行報告
2 山田温泉スキー学校の件
3 東横デパート開催の冬山相談所報告
4 支部クリスマスの集いの件（十二月十六日　ルーム）
5 山岳協会の件、経過報告

昭和三十五年一月二十五日発行
東京都千代田区神田駿河台四ノ六
発行所　社団法人　日本山岳会
編集者　山崎安治
頒価二十円　電話神田(25)八九五二番　振替口座東京四八二九番
印刷所　東京都港区赤坂溜池五番地　株式会社　技報堂